

## 概要

- 山形県最上地域は平成15年の冷害を機に野菜への転換が進み、農業技術普及課では若手農業者の育成を図ってきた。野菜販売額上位4品目のうち「若手ねぎ研究会」が平成25年に設立したのを契機に、にら（平成29年）、トマト（令和元年）、アスパラガス（令和3年）で各若手研究会が設立された。
- 農業技術普及課では、自主的な活動に移行したねぎを除く、にら、トマト、アスパラガスの各若手研究会を指導対象とし、最上総合支庁産地研究室、農協、市町村と連携して、若手生産者ごとの課題解決に向けた研修会や個別指導等の支援を行い、次世代のリーダーとなるよう育成を行った。
- 結果、若手生産者は栽培技術の向上が図られるとともに、横のつながりで相互に情報共有を図るネットワークも構築された。これらにより、地域の生産者や組織からリーダーとして認知されるようになった。

## 具体的な成果

## (1) 若手にら研究会（45名）

■省力栽培技術の理解が進み、機械移植機や省力的な調整技術、効率的な防除方法などの技術導入が進んだ。

■重点指導対象者の平均単収がそれぞれの過去3年間と比較して109%に向上した。

## (2) 若手トマト研究会（31名）

■会員における大玉トマトの平均単収は、管内の平均単収に対して105%となった。

■高温対策技術を指導し、遮光技術の導入が進んだ。

## (3) 若手アスパラガス研究会（38名）

■灌水設備の導入や防除方法の改善が図られた。

■重点指導対象者4名の平均単収は過去3年間と比較して130%となった。

■若手生産者が優良生産者に気軽に相談でき、いつでも指導を受けることができる体制ができた。

## (4) 研究会共通

■研修会やきめ細かな個別指導を行ったことで、各組織の若手生産者の技術力が向上した。

■若手生産者同士の横のつながりが生まれ、相互に情報共有を図り、切磋琢磨するネットワークが構築された。

■各地域にリーダーが誕生し、JA部会の役員や農業士等を務める生産者が増加した。



にら堆肥散布機実演会



トマト細霧冷房視察



ハウスアスパラガス視察

## 普及指導員の活動

## 令和4年度

- 越冬苗とマルチ対応移植機の実証ほを設置し、研修会を開催（にら）。
- 高収量生産者の管理実態調査（～R6）（トマト）
- 研修会を開催（①初期管理②秋期収量向上③夏越し技術）（トマト）
- 研修会を開催（①立茎管理・防除・拍動灌水装置②施肥③ハウス栽培）（アスパラガス）

## 令和5年度

- 新規栽培者・栽培経験の浅い生産者への重点指導（～R6）（共通）
- 研修会を開催（①省力移植機実演②土づくり③越冬苗）（にら）
- 研修会を開催（①圃場視察②高温対策）（トマト）
- 研修会を開催（①立茎管理・防除②圃場巡回③異常気象対策）（アスパラガス）
- 重点指導対象者（次期リーダー候補）への重点指導（～R6）（共通）
- 「最上野菜ファーマーズ担い手交流研修会」の開催（共通）

## 令和6年度

- 篤農家（生産者アドバイザー）による技術紹介動画の作成（にら）
- 研修会を開催（①堆肥散布機実演②篤農家技術紹介）（にら）
- 研修会を開催（①細霧冷房・日射制御灌水・抑制栽培②病害対策）（トマト）
- 研修会を開催（①圃場巡回②新品種視察③ハウス栽培）（アスパラガス）

## 普及指導員だからできたこと

- ・メーカーと連携してにらのマルチ対応移植機や堆肥散布機を実演会を開催。
- ・産地研究室と連携してトマトの温暖化対策技術の細霧冷房・日射制御灌水・抑制栽培を提示。
- ・市町村・農協との連携の他、地域の篤農家を生産者アドバイザーとして活用。

## 最上主要野菜の次世代リーダー育成

活動期間：令和4～6年度

### 1. 取組の背景

最上地域の主要野菜品目であるにら、トマト、アスパラガスでは、担い手の高齢化が進みつつあり、後継者不足が深刻化している。その一方で、栽培技術を継承し、さらに経営を発展させようと意欲的に活動する若手生産者が各地に出てきている。最上地域の野菜産地を維持・発展させるためには、産地を牽引する次世代のリーダーを育成することが必要である。このため、農業技術普及課では、品目毎に若手の農業者を対象とした研究会の設立を支援し、栽培技術の向上やネットワークの構築に向けて重点的な支援を行った。

### 2. 活動内容（詳細）

#### (1) 若手なら研究会

経営規模の拡大が進み、作業の省力化が課題であったことから、省力化技術の普及推進を図った。

- ・越冬苗とマルチ対応移植機の実証圃を設置し、研修会や移植機の実演会を開催した（R4～5）。
- ・重点指導対象者3名に排水対策の徹底や土壌診断による施肥改善等の指導を行って展示し、組織内への技術の普及・拡大を進めた（R5～6）。
- ・省力技術の導入推進に向けて、堆肥散布機の実演会を開催した（R6）。
- ・篤農家を「生産者アドバイザー」に委嘱し、その栽培管理動画を紹介する研修会を開催し、優れた技術の普及を図った（R6）。

#### (2) 若手トマト研究会

主産地である大蔵村とその他の地域の技術格差の改善が課題であったことから、大蔵村に優良モデル圃場を設置し、技術の底上げを図った。

- ・高収量生産者の管理実態調査を行い、肥培管理、灌水、着果管理、防除等の技術を共有した（R4～6）。
- ・秋期の収量向上を図るため研修会を開催し、初期管理や夏遮光等の夏越し技術の向上を図った（R4）。
- ・高温対策技術（細霧冷房、日射制御灌水、抑制栽培等）の導入を推進するにあたり、最上産地研究室や先行導入している若手生産者の圃場視察を実施した（R5～6）。
- ・豪雨等の影響で病害の発生が増加したことから、病害対策に特化した栽培研修会を開催した（R6）。
- ・次期リーダー候補者へ技術レベルアップ支援として、新作型導入や施肥改善の個別指導を行った（R6）。

#### (3) 若手アスパラガス研究会

栽培年数の浅い生産者の収量の底上げが課題であったことから、優良生産者を伴った巡回指導を通して若手生産者同士の連携を強化した。

- ・研修会を開催し、立茎管理、防除、拍動灌水、施肥方法の他、ハウス栽培の先行事例者の圃場を視察した（R4～5）。
- ・重点指導対象者4名に対して、灌水設備の導入や茎枯病の防除方法の改善等を指導してこれらの技術を展示し、組織内への波及を進めた（R4～6）。
- ・栽培年数の浅い生産者が多い管内西部地区において、優良生産者を伴った若手生産者圃場巡回を実施した（R6）。
- ・新品種を先進的に導入している生産者の圃場の現地視察を行った（R6）。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### (1) 若手ら研究会（45名）

当地域に適した機械化等による省力技術の普及を推進したことにより、省力栽培技術の理解が進み、機械移植機や省力的な調整技術、効率的な防除方法などの技術導入が進んだ。また、重点指導対象者においては、課題に応じた個別指導を実施して技術向上を図った結果、平均単収はそれぞれの過去3年間と比較して109%に向上した。

#### (2) 若手トマト研究会（31名）

優れた技術を持つ先輩生産者の栽培管理技術を若手生産者が習得する取組みを推進したことで、会員における大玉トマトの平均単収は、管内の平均単収に対して105%の高い水準となった。また、研修会において高温対策技術を指導した結果、遮光技術の導入が進んだ。安定したトマト生産が実現できたことから、新たに促成山菜の栽培を始める会員が増加し、冬期間の収益確保が期待される。

#### (3) 若手アスパラガス研究会（38名）

収量及び品質向上のため、会員個々の課題を明確にして個別指導を行った結果、灌水設備の導入や防除方法の改善が図られた。また、重点指導対象者4名の平均単収は過去3年間と比較して130%となった。

地域の優良生産者ととともに会員の個々の圃場巡回を実施し、若手生産者間のネットワークを構築した。ネットワークができたことにより、若手生産者が優良生産者に気軽に相談でき、いつでも指導を受けることができる体制ができた。

#### (4) 研究会共通

研修会やきめ細かな個別指導を行ったことで、各組織の若手生産者の技術力が向上した。

また、若手生産者同士の横のつながりが生まれ、相互に情報共有を図り、切磋琢磨するネットワークが構築された。これらの取組みによって各地域にリーダーが誕生し、地域の生産者や組織から産地を牽引するリーダーとして認知され、JA部会の役員や指導・青年農業士等を務める生産者が増加した。



にらの堆肥散布機実演会

トマトの細霧冷房視察

ハウスアスパラガス視察

#### 4. 農家等からの評価・コメント（最上町A氏（若手トマト研究会））

気象変動や資材高騰等の課題が多い中で、若手生産者同士のネットワークを構築し、生産者同士で情報交換を行いながら、課題解決に向けた取組みを行っていくことが大変重要だと感じています。研修会等を通して得た知識や仲間は、今後農業を続けていく上で大きな力になります。今後も研究会として新たな取組みにチャレンジし、研究会の活動をさらに活性化させていきたいと思えます。

#### 5. 普及指導員のコメント

##### （最上総合支庁農業技術普及課・専門普及指導員・島貫源基）

本課題により、各地域の品目ごとに次世代のリーダーとなる生産者を育成することができました。今後も新たなリーダーを育成するとともに、リーダーと若手生産者のマッチングを図り、地域全体で担い手を育成する体制を構築していきたいと考えております。

#### 6. 現状・今後の展開等

- （1）リーダー候補者へのレベルアップ支援として、個々の経営が抱える課題の解決に向けた栽培技術や経営改善支援を行い、リーダーとしての資質向上を図る。
- （2）若手生産者とリーダー生産者のマッチング（師弟関係づくり）により、若手生産者の栽培技術向上等を図る。
- （3）各若手研究会と連携して、管内の野菜産地を視察するバスツアーを開催し、野菜栽培に新たに取り組む生産者の掘り起こしを行う。